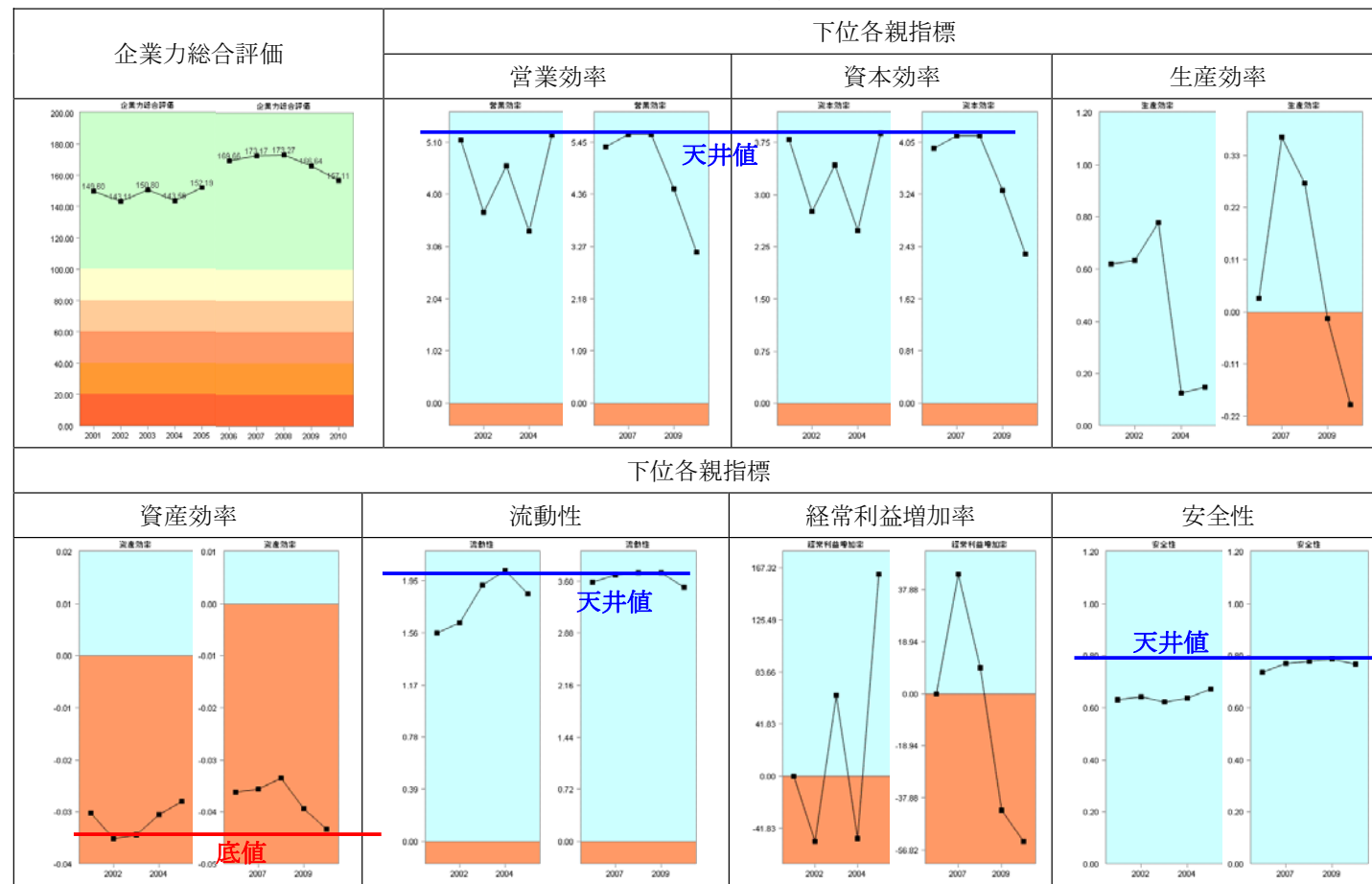


今回は、東洋炭素株式会社を見てみましょう。東洋炭素(株)は、等方向性高密度黒鉛を製造・販売している会社です。これは、六角形構造がきちんと並び、どの方向からでも物理的特質が変わらない(等方性)という性質があり、原子力分野、放電加工分野、半導体分野で利用されています。過去 2001 年から 2010 年までの 10 年間を見てみましょう。(2005 年までは個別・以降連結 F/S)



企業力総合評価は、2005 年から 2008 年にかけて安定的に企業力を上げました。営業効率の改善が牽引していますので、安定成長期と言えます。2009 年以降、企業力を下げました。営業効率は 2007 年天井値を打ちました。成長し営業効率が天井値を打つと、会社は次の成長に向けて新たな手を打つ準備をしなければなりません。そうしなければ、営業効率が天井値を打ち続けることは難しくなります。リーマンショックがあったので、企業の努力は分かりにくい状況ですが、東洋炭素(株)は 2009 年、2010 年は下落しています。ただし、2009 年のリーマンショックによる下落は他社より緩やかであると言えます。生産効率(人の利用度)は、2009 年は赤と青の真ん中にありますが、2010 年更に悪化し、赤信号領域にきました。資産効率(資産の利用度)は 10 期すべて赤信号領域にあります。投資をよくする会社に見られません。投資して収益が上がっているのですから、資産効率が赤信号領域でも問題はありませぬ。

流動性(短期資金繰)は 2004 年まで改善し続け、天井を打ちました。安全性(長期資金繰)も順調に成長し天井を打ちました。独自技術を持っている会社の強さが表れています。売上高、利益額を見てみましょう。ずいぶん大きな数字で、立派な会社だと感じます。

売上高・利益額推移 単位:千円

	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
売上高	18,115,577	15,441,359	16,074,136	16,844,458	18,389,009	25,492,527	31,381,259	34,531,125	30,974,306	27,924,853
売上総利	5,710,306	4,063,365	4,941,642	4,270,045	5,564,509	9,627,755	12,528,107	14,215,530	10,916,635	7,993,307
営業利益	2,880,300	1,452,677	2,361,371	1,164,091	2,622,966	4,955,826	6,925,644	8,031,933	4,741,230	2,253,141
経常利益	2,893,296	1,367,521	2,255,846	1,119,161	2,936,302	4,961,599	7,123,829	7,795,660	4,483,399	2,070,294
当期利益	1,355,607	129,154	-324,602	61,322	1,601,969	2,769,053	4,439,586	5,143,659	2,566,889	1,442,242

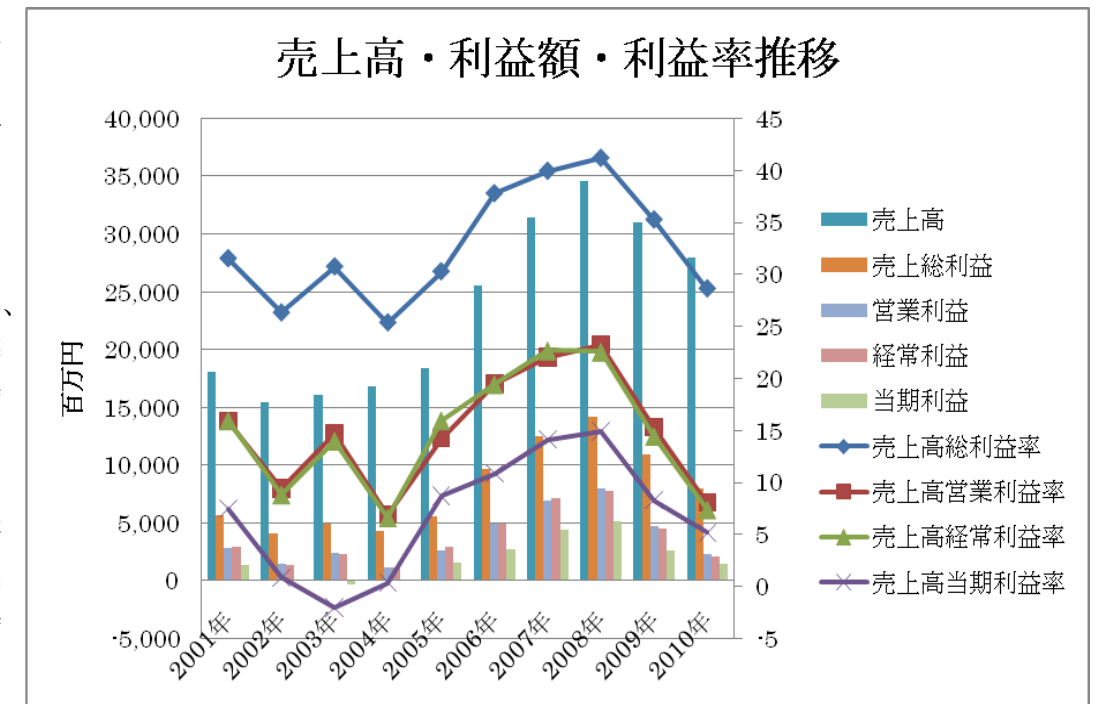
利益率はどうでしょうか。

利益率推移 単位:%

	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
売上高総利益率	31.52	26.31	30.74	25.35	30.26	37.77	39.92	41.17	35.24	28.62
売上高営業利益率	15.9	9.41	14.69	6.91	14.26	19.44	22.07	23.26	15.31	8.07
売上高経常利益率	15.97	8.86	14.03	6.64	15.97	19.46	22.7	22.58	14.47	7.41
売上高当期利益率	7.48	0.84	-2.02	0.36	8.71	10.86	14.15	14.9	8.29	5.16

グラフにしてみると、もっとわかりやすいです。

2004 年までは、利益率が安定しません。2005 年から 2008 年までは順調です。2003 年は当期利益が赤字です。不採算事業を撤退するなど、次の成長に向けた準備をするために、特別損失を出して当期利益が赤字になることがあります。赤字にも関わらず、営業効率は 2003 年改善しています。理由は、売上高経常利益率が



成長に重要な指標なのであって、売上高当期利益率ではないということです。次の成長に向けて特別損失を出すことは、短期的にはマイナス評価ですが、長期的にはプラスであることで説明がつくのではないのでしょうか。

まとめ

東洋炭素(株)は次の成長に向けて、準備をしているはず。次の成長が楽しみな会社です。

編集後記 元素記号 C。ノーベル化学賞を受賞したのも炭素の研究でした。炭素と炭素の間にパラジウムが入って元の結合をいったん解いて、別の新たな結合をさせるというクロスカップリング。人間模様を見ているようで面白い。いろんな用途に利用されている炭素。ただ黒いだけじゃないんです～ **文責 MS**